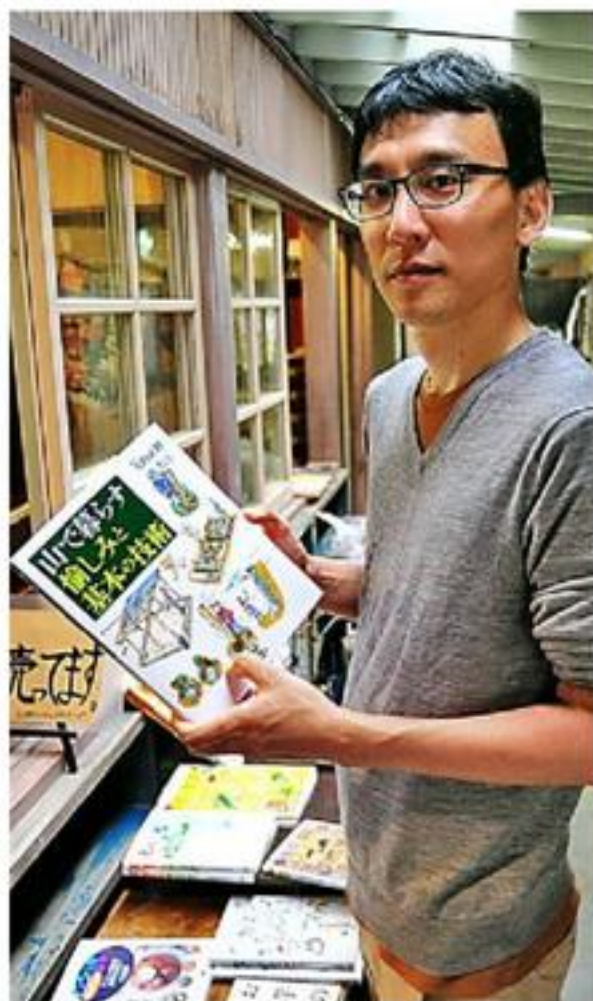


挑む!

「日本一僻地の書店」店主

柴田 哲弥さん(33)

廃校活用 個性派ずらり1千冊



和歌山市出身。地域活性化の方法を探ろうと、志を持つ若者が店を訪れることも多い。営業日は金～月の週4日。電話0735・30・4862

大阪駅から、特急と車で5時間あまり。熊野川の支流沿いにある和歌山県新宮市の九重地区で、廃校を再利用した「book cafe kujū」(ブックカフェ クジュウ)を開く。人呼んで「日本一僻地にある書店」だ。

東京の大学院で地域活性化を学び、博士課程に進む予定だった。面接の前日、「研究だけでいいのか」と思い悩んだ。2011年春に移住した。その年、紀伊半島大水害に見舞われた。床

上2階まで浸水した廃校の木造校舎は解体することに。

「もったいない。駄目元でも、何かやらなくては」。地元の人らが集う空間に、と思い浮かんだのがブックカフェ。住民らに半年かけて説明を重ね、泥だらけの校舎を学生ボランティアらと清掃した。解体は中止され、13年秋にカフェ、半年後に書店も始めた。

ライフスタイル、哲学、狩猟……。約1千冊の個性的な本が並ぶ。当初は協力してもらおう京都の書店が選んできたが、最近では自分でも仕入れ始めた。今では年間6千人ほどが訪れる。

30人ほどの集落にともった光。住民らは校舎の隣で野菜を売り始めた。作家を招いたイベントなど今後の夢も広がるが、「10年後になくなっていたら意味がない」。最大の目標は「店の継続」と力を込めた。文・写真 渡義人

記者から

● 継続こそ力なり。地域活性化を一過性のものにしたくないという、強い意志を感じた。